

研究だより 第44号



互いに磨き合い、学び続ける子供の育成(3年次) — 個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり —

ごあいさつ

校長 さかい さとし
副校長 やぶうち まさあき
 藪内 雅昭

陽春の候、皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、本校では令和3年1月20, 23, 29日の3日間にわたり、第102回教育研究発表会を開催いたしました。今回は、コロナ禍であることや、参加していただく先生方の学校における授業時間確保のため、オンラインによる配信を授業時間外に行うこととしました。初めての試みでしたが、県内外から3日間で約650名が参加をしてくださり、後日の録画視聴回数を含めると延べ約1,600名の皆様に本校の研究や実践事例を発信することができました。

実践事例提案では、授業の各場面におけるメタ認知を促す働きかけや個の発達に応じた支援等について、たくさんのご意見をいただきました。また、シンポジウムでは、自己肯定感とメタ認知との関係、学びの場や授業時間といった枠の問題等について議論していただき、子供のさらなる成長に向けて、深く考えるよい機会となりました。今後も地域の学校のモデルとなるような授業を常日頃からつくっていき、全教職員で決意を新たにしているところです。

ご支援ご協力をいただきました、香川県教育委員会、各市町教育委員会、香川大学教育学部の先生方、関係各位に対して、心より御礼申し上げます。

研究の概要

互いに磨き合い、学び続ける子供の育成（3年次）

— 個の発達に応じ、メタ認知を促す授業づくり —

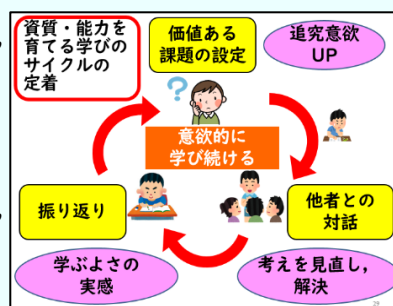
1. 学習意欲の向上をねらいとして

本校では、研究の方向を決めるにあたり、それまでの学習意欲に関わる研究成果や香川県教育委員会が推奨している授業改善の視点を基にし、より一層意欲的に学び、他者と協働しながら考え続ける子供を育成したいと考えました。そして、平成30年度に上記の研究主題を設定し、研究を続けてきました。

県学習状況調査の結果から、子供たちの実態として、「学びに向かう力・人間性等」に含まれる学習意欲について、学年が上がるにつれて低下するという傾向があることが分かりました。これは、本県及び本校に共通した課題の一つです。したがって、全ての子供が、解決すべき課題や学びの成果を適切に見つめ、主体的に次の課題を見だし、学習課題を設定することなど、学び続けようという意欲を高めることについて研究を深めれば、子供たちの学習意欲の低下といった問題を解決することにつながると考えたのです。学習意欲が高まることで、子供たちは主体的に課題解決に取り組み、資質・能力を高めていこうとします。

2. 互いに磨き合い、学び続ける子供の姿

教科等の学習内容について関心が高まった子供は、課題の解決に向けて、各教科の見方・考え方を働かせて、自ら考えるだけでなく、他者の考えやその理由等を注意深く聞き、自分の考えを再検討し、様々な解決方法を用いて考えていこうとします。また、その課題解決の後には、自分自身の成長や、他者と協働しながら学ぶことのよさを感じ取るとともに、自信を高め、新たに見出した問題を共有することで、次に解決すべき課題を設定し、その課題の解決に向けて、さらに学び続けていこうとします。



このように、「課題を解決するために、各教科の見方・考え方を働かせて自ら考え、他者の考えに耳を傾けながら追究し、見出した次の課題についても考え続ける子供」を「互いに磨き合い、学び続ける子供」と定義しました。

3. メタ認知を促す授業づくり

研究副主題にある「メタ認知を促す授業づくり」とは、課題や改善点を捉え、その解決に向けて行動を起こしていく際に、自分自身の学習活動や考えを俯瞰的に見る子供を育てる授業づくりと考えています。

メタ認知を働かせることができるようになると、子供たちは、様々な問題に直面した際、解決できたこととそうでないことを振り返り、「次に自分が解決すべきことは何か」等と考えて、主体的に課題を設定することができるようになります。また、ときに他者の力を借りながら、自己の取組を見つめ、必要な修正を加えつつ、課題の解決という目標の達成に、より意欲的に向かえるようになると思います。そして、そのような学びのサイクルを繰り返すことで、「互いに磨き合い、学び続ける子供」に育っていくと考えています。

授業づくりでは、一単位時間の学習活動を、課題解決中を中心に課題設定以前と課題解決後の三つの場面に分けて捉え、場面ごとに働きかけを行います。課題設定以前の場面では、子供が課題設定の妥当性を感じて、解決しようとする意欲を高めることができるように、課題解決中は、課題の解決に向けて子供が自分の考えを再考し、よりよい考えをもてるように、課題解決後は、子供が自分の成長や学び方のよさを実感し、次に追究したいことを見出すことができるように、それぞれの場面で働きかけを行っています。

メタ認知を促す働きかけを考える際は、教師による観察、メタ認知に関する質問紙調査、教科の特性に関する質問紙調査の結果を総合的に見る実態把握を手がかりにしています。また、実際に働きかけを行う際は、学年の発達段階や子供一人一人が本来持っている気質に配慮することを大切にしています。把握した実態を基に、学習環境を整える等の合理的配慮を行ったうえで、メタ認知を促す働きかけを行うと、よりその効果が期待できるからです。

国語科

第2学年

声や動きで表そう

～『名前を見てちょうだい』～

あずま たいすけ
東 泰右

『名前を見てちょうだい』を音読劇にして、1年生に発表するために、物語の様子がよく伝わる音読劇にしようと、登場人物の行動を具体的に想像しながら読み進めていきました。

課題解決中では、登場人物の行動について具体的に想像したことを付箋に書き、グループごとに考え見てちょうだいシートという拡大教材文に集約しました。そうすることで、どの叙述からどのような想像をしたかが一目で分かり、互いの考えの共通点・相違点を捉えることができました。動画では、考えやその理由を伝え合いながら具体的に想像したことについて話し合う姿や、交流を経て、自分の想像がさらに詳しくなったと思う部分を台本に加筆し、考えの広がりや深まりを感じている姿を見ていただきました。



この時のえっちゃんは、とても怒った顔をしているんじゃないかな。

参会者の声

- 想像する時の手がかりとなる四つの観点は、想像することが苦手な子供だけでなく、他の子供たちにとっても有効な支援であったと思います。このような個の気質に応じた支援が、全ての子供たちへの支援にもつながっているのだと感じました。
- 台本に加筆するだけでなく、最初の考えを書いた付箋も台本に戻すと、さらに考えの変容が見えやすくなると思います。

社会科

第3学年

坂出市の様子

～みんなが住みやすいコンパクトシティ～

あみの みらい
網野 未来

市内の様々な場所の様子について追究する際に、交通の広がりに着目させ、路線バスが坂出駅へ集まっていることに課題意識をもたせました。その理由を、既習を基に考え、コンパクトシティであることを捉えられるようにしました。

課題解決中では、各々の地域のシートを重ねることで市全体の土地利用の様子を比べやすくなった坂出くらしマップを使用しました。考えや、どの地域とどの地域を比べて考えたかという根拠を明確にして話し合えるように、マップにそれぞれの考えを書いた付箋を貼りました。動画では、マップと付箋を基に、友達と互いの考えや根拠を比べながら話し合い、バスを使う人は何の用事で駅の方に来るのかということについて理解を深めていく姿を見ていただきました。



駅前の病院に行くためにバスに乗るという考えは自分にはなかったな。

参会者の声

- 坂出くらしマップは、四つの地域のシートを自由に組み合わせられるので、どの地域とどの地域を比べるかを選択できて、よい教具だと思いました。
- 全体対話の際に、根拠について自分自身のもつイメージで話し合う様子が見られたので、実際にバスを利用する人の立場で考えを伝え合うことができると、さらに話し合いが深まったのではないのでしょうか。



算数科

第4学年

概数を使って考えよう

矢野 利幸

単元の導入で、概数を用いるよさについて知り、概数を活用することへの意欲を高めました。そして、生活の様々な問題場面で、場面に応じた数の処理の仕方を考え、その活用の仕方を知得していく単元構成にしました。

課題設定以前では、これまでに解決したことを示した学びの足跡と、次に学びたいことをまとめた概数問いボードの二つの補助黒板を用い、メタ認知を促すことで、妥当性を感じる学習課題が設定できました。課題解決中では、四捨五入、切り上げ、切り捨てから選択した考えが一目で分かる概数シートを用いて交流しました。対話を通して、友達の考えとの異同に気づき、場面に応じたより適切な処理の仕方に再考する子供の姿等を動画で見いただきました。

参会者の声

- 子供たちが、次にしたいことを出し合い、学ぶ順序を自ら決めることで、より主体的に学習に取り組んでいくことができると分かりました。
- 三つの数の処理の仕方から生活場面に応じた適切な考えを選ぶために、対話を通して、自分の考えとの異同を捉え、納得しながら再考できたことが振り返りに記されており、よい学びができていますと感じました。

理科

第3学年

調べて発見 音の秘密 ～「マイ系電話」を作ろう～

なかや けいご
中家 啓吾

単元の導入で、「マイ系電話」を完成させるというゴールを共通理解しました。そこへ向けて音の性質や系電話の仕組みについて一つずつ理解を深めることで、作りたい系電話が明確になり、追究意欲が高まる単元構成にしました。

課題設定以前では、単元のゴールや、今後、解決していきたい問題等を記した、音の秘密解決ボードを基に、本時の学習課題を共通理解できました。課題解決中では、3種類の系電話(針金、ゴム、ビニールの系)の聞こえ方を調べる際、自分の考えをメタ認知しやすくするために、聞こえた声の大きさを聞こえ方確認シートに5段階で記録しました。友達と比べながら結果を確かめ合っている交流の様子や、系電話で声を聞いた子供の反応等を動画で見いただきました。

参会者の声

- 問いを全員で共有することで、実験して結果を確かめたり、結果を共有したりすることを通して、自分の結果や友達の考えについて納得しようとしていくことが分かりました。
- 声の大きさを子供が数字で表し、それを共有する場面が参考になりました。タコ系電話の声の大きさを基準として共通理解しておくことで、共有場面で友達の意見と比較しながら考えられているところが印象的でした。



音楽科

第3学年

集まれ動物ミュージック

～いろいろな声で表現して遊ぼう～

たかつか ひとし
高塚 仁志

音楽を形づくっている要素を基に声の出し方を工夫することで、動物の様子や気持ちを表現する音楽づくりを行いました。

課題設定以前では、題材のゴールや、そこに向かう道筋を示した発表会への道を見ることで、学習計画の内、どこまで達成できているのかを確認できるようにしました。課題解決中では、声&技の工夫カードに自分の考えを表し、友達と交流することでメタ認知を働かせ、友達の考えとの共通点や相違点に気付けるようにしました。動画では、発表会への道を見て学習課題を設定する様子や、声&技の工夫カードで声の出し方についての意見を比較したり、実際に試したりしながら、音楽をよりイメージに合ったものにしていく子供の姿を見ていただきました。

怒ったアヒルは「クワックワック」と声をくり返すといいと思うな。



参会者の声

- 声&技の工夫カードを使った意見交流がグループ内でうまく機能していました。
- 楽しそうな題材に工夫されていて、子供たちが楽しみながら音楽づくりに取り組んでいる様子が伝わってくる授業でした。
- 今回扱った声（高さ・大きさ・長さ）だけでなく、感情表現としての声色（怖がる様子を声を震わせて表す等）がもっと工夫できるのではないのでしょうか。

図画工作科

第4学年

光と影で自分のイメージを表そう

～光とかげから生まれる形～

そうだ ともこ
造田 朋子

影絵の手法を用いて思い付いたイメージを表す造形遊びの題材の導入で、「影の魔術師になる」というゴールを設定し、影をつくるための造形的な視点を段階的に獲得する学習計画にすることで、終末まで高い意欲を継続できました。

課題解決中では、紹介したい工夫を視点ごとに色分けしたシールで示したワークシートを使って、友達と交流する影の魔術見付けタイム・シートを設定し、メタ認知を促しました。子供たちは、形の感じ、色の感じ、光の当て方などの視点を基に、互いのよさを認め合いながら新しい工夫を見付け、自分の影に生かしたいという思いをもちました。動画では、友達と交流して見付けた工夫を生かし、影をつくり、つくりかえ、つくる子供の姿を見ていただきました。



〇〇さんのように、飾りを上から垂らして揺らしてみると面白い影になったよ。

参会者の声

- 造形遊びの題材では、子供が造形的な視点を発見しながら、段階的に獲得していくという学習計画が合っていると思いました。
- 影の魔術見付けシートやタブレットで撮影した写真で、つくった影を記録していくことは、自分の変容を感じることができるとなっていました。
- 子供たちが自然に学び合える学習環境づくりの設定も大切だと感じました。



家庭科

第6学年

すっきりさわやか 身の回り

たなか あすか
田中 明日香

みんなが気持ちよく過ごせるように整理・整頓の仕方を考えていく題材の中で、考える、実行して自信を高める、自分の活動や学習を振り返るというサイクルを繰り返す行うことで、家庭実践につながるようにしました。

課題解決中では、班で相談しながら衣類を収納する際、「畳み方」「入れ方」を見てみてポップに書くことで、収納の工夫を言語化する支援を行いました。交流では、収納の工夫の理由を尋ね合いながら互いの考えのよさを見つけていけるように、声掛けを行いました。その後、子供たちが自分の班に戻り、見つけた工夫を試したり、話し合ったりしながら、メタ認知を働かせ、自分の生活に合った工夫について考えを深めていく姿を、動画を通して見ていただきました。



取り出しやすいように、
服を立てて並べたよ。

参会者の声

- 子供たちの考えが視覚化される見てみてポップがあることで、自分の考えと比べながら質問でき、交流が活発になっている様子が分かりました。目的意識をもつことで主体的に話し合う姿が参考になりました。
- 交流の際に「取り出しやすさ」や「片付けやすさ」といった視点をもたせると収納の工夫を比較しやすくなり、さらに家庭実践につながるのではないのでしょうか。

体育科

第2学年

いろいろなコースを楽しくラン ～走の運動遊び～

あき みさこ
安岐 美佐子

楽しく走れるコースを「作る」「見付ける」を繰り返して成功経験を積み重ねる単元構成にし、全員が意欲的に取り組めるようにしました。

課題設定以前では、子供たちが今までにできたことや課題設定の理由をおもしろランニングコース発見への道¹を基に説明し、学習課題を吟味しました。課題解決中では、おもしろポイント看板に「スピード」「向き」「リズム」で色分けしたおもしろポイントシールを貼り、楽しく走れた理由を伝え合いました。シールの色や貼られた場所を比べ、自分と友達の考えの共通点や相違点に気付き、さらに楽しく走れるコースを見付けようと、意欲的にコースを選んで走りました。低学年でメタ認知の素地をどのように養っていくのかを提案させていただきました。



どうして、「スピード」のシールを
ここに貼ったの。

参会者の声

- 補助黒板に単元のゴールや成功経験の積み重ねが可視化されていて、課題設定の妥当性を感じることに繋がっていました。
- おもしろポイントシールなど、自分の考えを表出する方法では、発達段階も考慮されていて参考になりました。
- キラリタイム（振り返り）では、観点が絞られていたので、低学年でも何を考えればいいのかよく分かっていると感じました。



特別の教科 道徳 第6学年

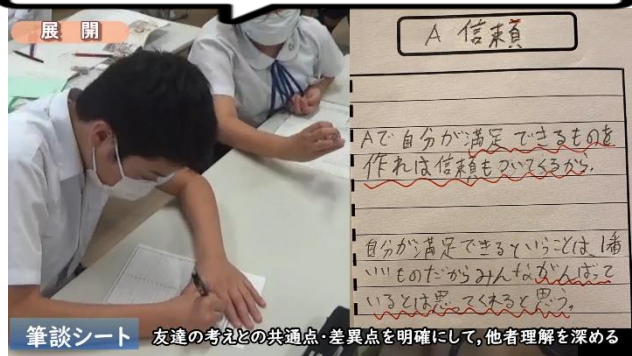
自分の心に誠実に[A正直, 誠実] ～『のりづけされた詩』～

やまもと けんた
山本 健太

誠実な生き方を実現していこうとする思いや願いを高められるような授業づくりに取り組みました。誠実に行動する際に大切にしたい気持ちについて、友達と対話しながら、多面的・多角的に考えることを大切に、実践を行いました。

展開では、筆談シートを用いて、「誠実に行動する際の思い」について話し合いました。「信頼を守りたい」「素直に過ちを認めたい」などといった誠実な行動の背景にある思いに迫っていきました。終末に設定した鳥の目タイムでは、「自分のよさ」や「課題」「心に残った友達の意見」「実行の難しさ」等の振り返りの観点をを用いて、誠実な生き方について振り返りました。メタ認知を促したことで、自分自身を見つめ、生き方を考える子供の姿を見ていただきました。

誠実に行動する時は、どんな気持ちが必要かな。



参加者の声

- 事前に教材を読み、一人一人が問いをもって授業に臨み、自分の考えたいことが学習の目当てになっているのがよいと思いました。
- 道徳でメタ認知する能力が高まると、自己理解が深まり、自分の生き方についての考えをさらに深めることができると思います。
- 誠実な行動が「分かっているけれどできない」という心の葛藤部分を取り上げ、語り合う時間も大切にしたいと感じました。

保健室経営

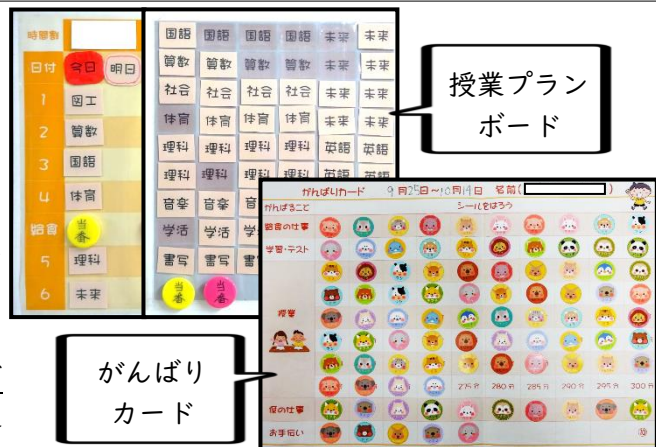
特別な支援を必要とする子供に 寄り添う保健室経営

むらかみ あやこ
村上 絢子

「見通し」「達成感」「自ら課題を解決する力の育成」をテーマに、保健室登校児を対象として、授業プランボード・がんばりカード・アシストガイドを用いた支援を行いました。その結果、見通しをもちにくい子供や達成感を感じにくい子供が、自信を高め、意欲的に活動することができました。

また、SCやSSWとの連携を積極的に行っています。例えば、附属坂出学園合同で行う学校保健安全委員会の企画・運営の仕方、新型コロナウイルス感染症によるストレスへの対応の仕方、SSTの効果的な実施方法等の取組を提案しました。

保健室に入室する子供を中心としながら、全ての子供の気質に応じ、寄り添う支援の在り方について、今後も検討していきたいと思っています。



参加者の声

- 保健室登校している子供に対する保健室での個別支援、教室での集団支援など、場に応じた支援が参考になりました。
- 「実態に応じて」支援することは、どの教職員も心に留めておかなければならない大切な考えだと思いました。
- 担任・養護教諭・SC・SSWが連携しながら、SST等を実施することで、効果を高めることができると感じました。



シンポジウム

「互いに磨き合い、学び続ける子供の育成」及び 「メタ認知」と「これからの教育」について

シンポジウムに先立って、田中裕一先生より、本校の研究についてVTRでご助言をいただきました。そして、以下の4名の先生方には、メタ認知やこれからの教育についてそれぞれの専門性を生かしながらお話しいただきました。今後の教育に求められる教師観について知見を深めるシンポジウムとなりました。



中邑 賢龍 先生



白川 章弘 先生



岡田 涼 先生



坂井 聡(本校校長)

なかもら けんりゅう

中邑 賢龍 先生 東京大学先端科学技術研究センター 教授

(今後の教育に求められるのは子供や教師が)力を発揮できる場を学校が提供できるかということです。例えば、子供たちに年間10枚お休み券を配り、自分の時間を自分でコントロールすることを教えれば、(子供たちの)ストレスは下がり、もっと(関心のある世界へ)飛び出していこうとする力が育ちます。また、教師の趣味に関係する授業を行う日を設ける等、自らの趣味を通して子供や地域の人と学ぶ場を作れば、教師も楽しく働けます。未来を見据えた枠にとらわれない教育や、リアリティを取り入れたコミュニティや家庭とつながるようなシームレスな(継ぎ目のない)教育ができれば、社会で活躍してくれる子が育つと思います。

しらかわ あきひろ

白川 章弘 先生 香川県教育センター 主任指導主事

授業を拝見して「どうしてそう思ったの」「どうして交流するの」などの教師の問い返しが非常に多いと感じました。その問い返しがメタ認知を促すためには重要だと感じました。子供が目を輝かせるおもしろい授業を行うためには、子供の背景にある生活環境や、何に関心を抱いているか等を教師がよく見ることが大切です。図画工作科の授業では、教師が「なぜ友達作品を見に行くのか」を問うていました。さらに、実際に作品を見に行った時に、子供たちは本当に驚いており、教師は子供たちの気付きや、協働して学ぶよさを価値付けていました。このようなよい経験を繰り返していくことも重要だと感じました。

おかだ りょう

岡田 涼 先生 香川大学教育学部 准教授

発問を聞いていると「なぜ詳しく知りたいのですか」など、メタ認知を促す支援を丁寧に行っていました。それ以外に教室環境や授業づくり等を通して、子供たちが様々な基準でメタ認知できるように、軸を増やしてあげてほしいです。今は外から教師が問うことで促していますが、何もしなかった時に子供自らがメタ認知を働かせているかを見たいです。メタ認知も自己調整も、最初は型として教え、少しずつ手を離し(働きかけを減らし)ながら自分のものとするのがいちばんなので、そこにチャレンジしていただきたいです。

さかい ざとし

坂井 聡(本校校長) 香川大学教育学部 教授

ユニセフが2020年9月に行った調査では、日本の精神的幸福度は38カ国中37位というデータがあります。そこから考えると、これからAIが入ってきたり、GIGAスクール構想が入ってきたりする中でも、人と比較する前にまず、その子にとって参加しやすい授業の形とはどういったものなのかを考えていくことが大切です。そして、同じ土俵に乗って授業を受けることができるような支援をしていくとよいと思います。

たなか ゆういち

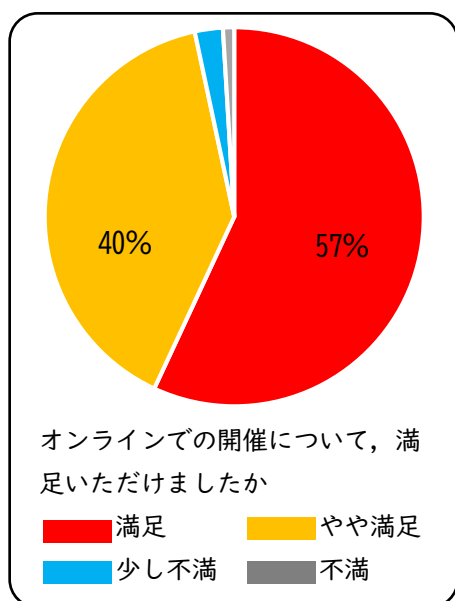
田中 裕一先生 兵庫県教育委員会事務局特別支援教育課 副課長兼教育推進班長

授業においてPDCAサイクルをしっかりと回していただきたいと思っています。その際、大事になるのが適切な授業評価です。しっかりと評価を行い、次の授業に生かしてください。特別支援教育における授業改善としては、個の発達に応じた適切な指導と必要な支援の両方を充実させていきたいです。本研究を通して見いだした有効な支援は、次にしっかりと引き継いでいってください。



オンライン研究会という新たな形

本年度は Zoom を使ったオンライン形式で研究会を行いました。本校としては、初めての取組であったため、至らない点多々あったかと思えます。その一方で、コロナ禍においても開催できたこと、遠方からもたくさんの方に参加していただけたことはオンラインならではのよさであったと思えます。アンケートにて、オンライン形式の是非、今後の研究会の在り方についてのご意見をいただきました。ここにご紹介するとともに、よりよい研究会の形を探って参りたいと思えます。

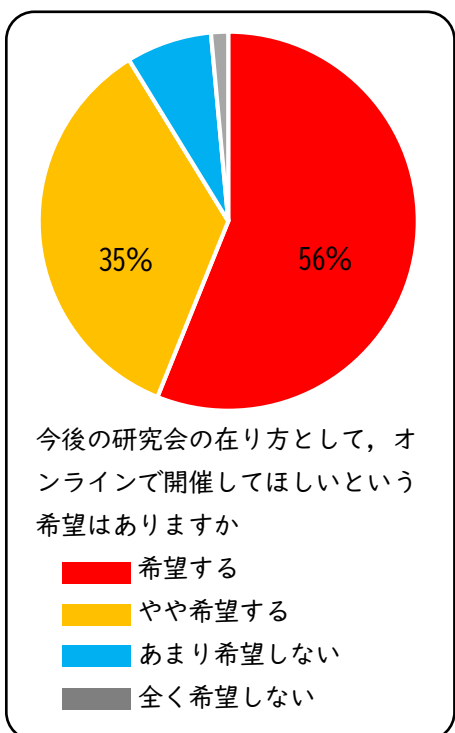


オンライン開催でも提案内容が十分によく分かりました。チャット機能を使って意見交流すると、他の方の意見も残るので討議がしやすかったように思います。

オンラインでの開催となると、準備等、大変なこともあるとは思いますが、移動のことを考えずに参加できるのが非常にありがたいです。また、改めて動画配信や資料の掲載等もご配慮いただいたおかげで、リアルタイムでは難しい、同じ時間帯の発表を複数見ることができました。

実践提案の動画編集の仕方が、大変参考になりました。子供のつぶやきがしっかりと視聴者に伝わるので、テロップは有効だと感じました。

編集等を含め、オンラインでの授業の見せ方が参考になりました。見る側に伝えたいことが焦点化され、分かりやすかったです。



オンライン開催は気軽に参加できるからよいと思いますが周りの雰囲気や、反応が分かりにくい部分があると思うので対面のほうが私はよいと思います。

オンラインでの提案であったり、45分間の授業を全て見ることができなかつたりしたため、授業の内容や工夫が今ひとつ、つかめなかったのが残念でした。

オンラインで開催したという挑戦に敬意を表した上で、協議が「一方通行」のように感じられたので、さらなる改善・挑戦の可能性を感じました。例えば、参会者が協議の場ではミュートを外して語る、もっと協議に時間を割く、などの工夫が考えられます。

わくわく 授業づくりワークショップ

本年度のわくわく授業づくりワークショップは、計4回行いました。Zoomを使ってオンライン開催にしたことで、全国の方々と授業づくりについて一緒に考えることができました。以下に、各ワークショップの概要と参加者の感想をまとめました。



報告や詳細はこちら
(第4回報告を含む)

ユニバーサルデザインの視点

109名参加

本校の坂井校長より「自ら学びたくなるためにはどんな環境が必要なのか?~UDの視点で、できるを体験できるように~」というテーマで本校の実践を交えながら、全ての子供の学習意欲を高めるために、人的環境である教師ができる配慮と工夫について提案させていただきました。子供が活躍できたときは、内的要因(自分の力のおかげ)、うまくいかなかった時は、外的要因(環境・教材のせい)と考えられるようにするなど、子供と関わる際に大切にしたいことを幅広くお伝えしました。

他者との比較によって、子供たちがやる気を無くしてしまわないように、過去の自分を見つめて、成長を感じられるように学習環境を整えていきたいものです。



神奈川県
小学校教諭

子供たちができなかった時にする言い訳はネガティブなものだと思っていましたが、子供自身が心理的なダメージを最小限にしたいからだという視点が勉強になりました。子供たちに共感的に接して「どうしたらできるようになるか」を一緒に考えられる教師になりたいと思いました。



広島県
大学生

子供のせいにはしない。これが何よりで、そのために、教師が指導について学ぶべきだと思いました。また、できない苦しみや困っている気持ちに寄り添いながら次の一步を模索することが大事だと思いました。今後に生かしていきたいと思います。



東京都
NPO 法人職員

働いている大人に対しても、大切な考え方や伝え方、場の作り方など参考になるものが多くありました。

特別の教科 道徳

70名参加

教材「ロレンゾの友達」を用いた実践を紹介する中で、教材分析の仕方や授業を三つの場面(導入、展開、終末)に分け、それぞれの場面でのメタ認知を促す働きかけなどを提案させていただきました。そして、高松大学の七條正典先生より、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた道徳科の授業づくり」についてお話をいただきました。道徳科の授業づくりでは、「道徳科の特質を生かす」ことが大切であり、道徳科の特質とは、①道徳的価値についての理解を基に、それを②自分自身との関わりにおいて捉え(主体的)、③多面的・多角的に考えること(対話的)を通して、④自己の生き方について考えを深める学習(深い学び)を行うというものです。この四つを踏まえた授業づくりが重要ということでした。



島根県
小学校教諭

普段の道徳科の授業をする際に、自分事として考えさせることが難しいと感じていました。この悩みを解決するには、教材研究をするときに、様々な視点で考えていくことや、発問の仕方等の工夫が重要なのだと感じました。



香川県
大学生

道徳科の授業をつくるのは難しいと感じていましたが、今回のお話を聞いて、子供たちの心に種をまくような授業をつくりたいと思えました。将来の自分の授業に生かしていきたいと思いました。



徳島県
NPO 法人職員

道徳科の授業の意味は、その後の学校生活や家庭生活で、どのように生きていくかを考えることだと感じました。

図画工作科

28名参加

講師に、日本画家で日本藝術院会員の福王寺一彦先生と、香川県小学校教育研究会図画工作部会の元部会長の湖崎眞二先生をお招きしました。福王寺先生からは、ご自身の作品に込められた思いや、感受性豊かな子供時代において感動し心が動かされる経験を積む大切さ等をお話しいただきました。湖崎先生からは、具体例を基に授業づくりのポイントや教師の役割等を詳しく教えていただきました。



新潟県
小学校教諭

子供が主体的に作品づくりをするには、想像力の広がりや技能のよさが分かる資料を提示することが大切だと分かりました。図工においても、様々な経験と結び付けることで学びがより深まっていくことが分かりました。

家庭科

25名参加

学習指導要領に基づいた手縫いやミシン縫いの教材の工夫について提案しました。手縫いの指導については、練習用布と合わせて使いながら、繰り返し練習して技能を習得できるフェルト教材を提案しました。ミシン縫いの指導では、5年生と6年生それぞれの題材で扱うべき技能の段階に合った製作物について紹介しました。少ない材料で簡単に製作できる小物を、実際に作っている様子なども紹介しました。



富山県
小学校教諭

家庭科の玉留め・玉結びを楽しく練習する教材が参考になりました。学習指導要領に基づいた被服実習の系統性がよく分かりました。実演を交えて説明してくれたので、授業のイメージをもちやすかったです。

外国語科

25名参加

英語の表現を、楽しみながら習得できる活動や、英語への気付きを促す板書の工夫等を紹介しました。単元の前半に設定すればよい「聞くこと（インプット）」中心のゲームと、単元の後半で設定すればよい「話すこと・書くこと（アウトプット）」中心のゲームを紹介しました。授業での活用の仕方をイメージしやすいように、実際に、チャットや音声を使用して体験していただきながら提案しました。



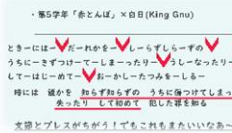
広島県
小学校教諭

実際にゲームをしながら参加できて大変楽しかったです。チャットを使って質問もでき、子供たちが楽しみつつも、学ぶべき内容を意識した活動の設定についてよく分かりました。授業で生かしたいと思います。

音楽科

25名参加

音楽科の授業に J-POP を取り入れることで子供の意欲を高めつつ、生活の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成する提案をしました。また、実際に参加者の方々と一緒に J-POP の曲を視聴し、なぜその曲がおもしろいと感じるのかを分析しました。今後は、歌唱・器楽等の表現活動での取り入れ方や、一人1台 PC の音楽科での活用についても研究を深めていきたいと思っています。



長野県
小学校教諭

実践事例がたくさん盛り込まれていて、次の授業から活用できそうな内容ばかりでした。「J-POPを取り入れたいけれども難しい」と思っていたので、まずは鑑賞の題材から挑戦してみたいと思います。

体育科

28名参加

全ての子供が「できた」そして「もっとしたい」と思えるように簡易化した教材や単元構成の工夫について提案しました。その中で、子供の実態把握を丁寧に行う大切さを解説しました。また、低学年「シュートゲーム」、中学年「タグラグビー」、高学年「セストボール」を実際に行いながら、子供が熱中できるように教師がどのような言葉かけをすればよいのかを解説しました。



静岡県
小学校教諭

教材教具や単元構成の工夫などが大変参考になりました。体育に苦手意識のある子供が重要な役割を担い、ゲームに参加できるようにする工夫がたくさん盛り込まれていて、授業に生かしたいと思いました。



次年度研究に向けて

第102回教育研究発表会でいただいたご意見

「研究理論提案」では、授業の「課題」に関わる場面でのメタ認知について、子供、教師の両者が、その重要性を共有化できていることが理解できました。

合理的配慮やユニバーサルデザインの考えを生かした支援などの特別支援教育の視点のごく自然に授業づくりに反映されており、日々の取組の姿勢がうかがわれました。

単元計画を利用した、学習課題の設定や振り返りの在り方が参考になりました。

子供の学習意欲や意識の流れを大切にする学習の重要性を改めて実感しました。

本研究会を通して、「互いに磨き合い、学び続ける子供」の姿として、自己の活動を振り返ったり、友達と自分の考えを比較して、再考したりするなどのメタ認知を働かせている姿、主体的に対話したり、次の課題の解決に向かったりする姿をご覧いただけたのではないかと思います。

ご参会の皆様からいただきましたご意見を今後の研究に生かして参りたいと思っております。



今後の研究の方向性

★これまでの研究を基に、学習意欲を育てることに重点を置き、引き続き、新しい時代に必要となる資質・能力を育成する授業づくりを行う。

★メタ認知以外の様々な能力にも研究を広げ、より主体的に、粘り強く課題解決に取り組み、変化の激しい社会に対応していけるような子供を育てていく。



あ と が き

教 頭 てはま だいすけ
出 濱 大 資

昨年度に引き続き「互いに磨き合い、学び続ける子供の育成(3年次)」を研究主題とし、集大成となる提案をいたしました。新型コロナウイルスの影響により多くの制約がある中、県内外の関係諸機関から多くの方にご参会いただき、様々な立場から貴重なご意見をいただいたこと、職員一同感謝しております。

本年度は、社会状況に鑑み、初めてオンラインでの研究会に踏み切りました。モニター越しの提案発表となりましたが、提案に対するご参会の皆様のご考えや思いにふれることができ、教育界の底力を感じた研究会となりました。このような時期だからこそ先生方とのつながりを大切にしながら、より公立校に貢献できる研究を目指して参ります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

編 集 委 員

中家 啓吾 竹森 大介
山本 健太 滝井 康隆
米谷 直樹 好井 佑馬
西吉 亮二

令和3年3月15日

香川大学教育学部附属坂出小学校

TEL 0877-46-2692 FAX 0877-46-5218

E-mail sakaide@kagawa-u.ac.jp

URL <http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~sakasho/index.html>

